

宝くじ こぼれ話

幸運を招いた「新しいもの好き」と「新・人生」招いた思い出の古時計

今年もハロウィーンが直にやってくる。そして、宝くじファンにはお楽しみ「ハロウィンジャンボ宝くじ」発売の季節だ。この「ハロウィンジャンボ」が誕生したのは4年前。市町村振興・第728回全国自治宝くじでのことで、いまや「宝くじ歳時記」の1つだ。

新登場のこの宝くじで1等と前後賞合わせて4億円を当てたのは、熊本県の会社員Nさん(45)。20年来の宝くじファンのNさんは「なんでも新しいものが好きな性格」とか。この

ジャンボ宝くじも「初」ということで、連番で30枚を購入。それが、当せん。「なにごとにも挑戦ですよ」と満面、笑顔で語るNさんだった。

この宝くじと同時発売の「ハロウィンジャンボミニ」(新市町村振興・第729回全国自治宝くじ)で1等と前後賞合わせて5,000万円を当てたのは神奈川県の主婦K子さん(61)だ。20年前に亡くなった夫が海外で購入した時計を家で発見。時計のベルトが古く、汚れていたので墓参帰りに時計店で新調。その店のお隣の宝くじ売り場でなんとなくこの宝くじを連番で10枚購入。そうしたら、大当たり。「主人が私に、新しい人生を生きなさいと応援してくれたみたいです」と涙ぐむK子さんだった。



ご当地クーちゃん

トキクーちゃん

宝くじ おもしろ話

「勝札」「第1回宝籤」の大きさ ともに「タテ5cm×ヨコ10.5cm」

日本政府が太平洋戦争の戦費調達とインフレ抑止を目的に「富くじ」である「勝札(かちふだ)」を発売したのは昭和20年7月16日。しかし、発売最終日の8月15日に終戦。このため「勝札」の発売はその後、廃止。だが、政府は「戦災復興」と「インフレ抑止」を目的として、富くじの継続発売を決定。新たに「宝籤(たからくじ)」の愛称で、その第1回

を同年10月29日に発売した。今年はそれから数えて75周年の記念イヤー。そこで宝くじ誕生にちなんだ「おもしろ話」をお届けしよう。

「勝札」の大きさの話題。「勝札」のサイズは「タテ5cm×ヨコ10.5cm」だった。このサイズが基本型となって、この後に誕生する政府発売の「宝籤」へと受け継がれ、政府発売の「第8回宝籤」まで続いた。

しかし、各宝くじ券の実物の寸法を調べると、各宝くじともタテとヨコで「1mm~5mm」の範囲で異なるものが多い。これは宝くじ券の製作過程での誤差で、終戦直前・直後に使用された宝くじ券の断裁機の性能不良によるものと考えられる。



ご当地クーちゃん

キューヒットクーちゃん

宝くじ おもしろ話

宝くじ券の「大きさ」あれこれ 史上最小と史上最大の宝くじは

「75周年」にちなんだ話をもう1つ。「勝札」や政府「第1回宝籤」の宝くじ券の大きさは「タテ5cm×ヨコ10.5cm」。そして、現在、通常に発売されている宝くじ券の大きさは、昭和35年4月以降、すべてタテ7cm×ヨコ15cmに統一されている。この2つ宝くじ券の面積だが、「勝札」は52.5cm²で、現在の「宝くじ」は105cm²。現在の宝くじは、なんと75年前の「勝札」のちょうど倍の大きさだ。不思議だ。

宝くじ史上で、サイズが一番小さい宝くじは昭和23年12月10日に発売の政府「第2回

宝くじ」だ。その大きさはタテ3.3cm×ヨコ7.4cmで、面積は24.42cm²。これは終戦直後の物資不足、紙不足の時代を反映するもので、現在の宝くじと比べて約4分の1の面積だ。

逆に、史上一番大きい宝くじは昭和46年5月15日に発売の東京港開港30周年記念「第761回東京都宝くじ」だ。そのサイズはタテ21cm×ヨコ15cm。これは通常の宝くじ券3枚を横に上段・中段・下段と重ねた形で、全体に東京港の絵が描かれている。上段と中段に境はないが、中段と下段の間にはミシン野が入っていて切り離せた。つまり、上段と中段は「付票」で、下段だけが1枚の「宝くじ券」という変わり種だ。同じ大きさで同じスタイルの「3枚のシートくじ」は多数あるが、同じ形・大きさで「1枚の宝くじ」というのは、ほかにない。

